

あの夏の囚人

<物語の背景>

携帯電話が普及する少し前の時代。

伊知哉は自分の遺影を見つめていた。葬儀が行われていた。少し風変わりな葬儀だ。神社の境内に棺が置かれている。その前で神主が伊知哉には理解できない言葉を読みあげている。伊知哉もよく知っている人物だ。彼はまだ儀式に慣れていないらしく、折りたたまれた紙を手の内側に隠し、ちらちらと目をやっている。

風変わりではあるが、ごくごく当たり前の光景でもある。ここ月守島で生まれた者は、出産や結婚、死といった人生の節目に関わるすべての儀式を、ここ兎我野神社で行う決まりなのだ。

当人が、島から出る決断をしないかぎり。

伊知哉は自分が死人だと気づいている。目覚めたのは2日前だ。最初は窓のない部屋で、白衣の男性に見下ろされていた。いまならわかる。あれは、治療ではなく検視だった。伊知哉が身を起こすと、背後には自分自身の身体が残された。胸を開かれた遺体が。医師は伊知哉の姿に気づいていない様子だった。

その後、伊知哉は医師と警察関係者が話す様子を、彼らのうしろに立って、ぼんやりとながめていた。彼らいわく、今回の死に事件性はないとのこと。おそらく事故だろう、崖で足を滑らせ、十数メートル下の岩場へ転落したのだろう、という話だった。

だが、そんなことは絶対にあり得ない。20年以上も暮らした、目をつむっていても歩けるような場所で、足を滑らせるなどということは。

自殺だろうか。そのきっかけとなるような、絶望するような出来事が起きたのだろうか。

まさか、殺人だろうか。

知りたい。

自分はなぜ死んだのか。死なねばならなかったのか。

自分がどんな未練を残しているのかは知らない。思いだせない。だが死の真相がわかれば、すべてが明らかになるはずだ。

葬儀には旧友たちが集まってくれている。ほぼ十年ぶりに見る顔もある。彼らの中には伊知哉の声を聞き、姿を見ることが出来る者も含まれている。そう——ここ兎我野神社の血筋に連なる者たちは、代々、そうした力を有しているらしい。幸い、宮司の光秀やその妹の詩織、弟の豪、彼らの叔父である久助とは長い付き合いだ。きっと力になってくれる。彼らを介してのやりとりにはなるが、ほかの連中も助けてくれるだろう。

ずっとバラバラだった仲間たちと、久しぶりに会えた。久しぶりに、一緒になにかができる。それがうれしい。そのきっかけが自分の死でなかったなら、もっと良かったのだけれど。

<登場人物>

- ・伊知也 (男性/27歳)
- ・双葉 (女性/27歳)
- ・光秀 (男性/27歳)
- ・詩織 (女性/25歳)
- ・豪 (男性/25歳)
- ・ロック (男性/27歳)
- ・奈々子 (女性/27歳)
- ・八田 (男性/27歳)
- ・久助 (男性/42歳)

